

おやまのなかで

1、おやまのしたで

かんなぎさんちのたつくんは、お山の下で生まれました。

小さなころからおとうさんがお山の近くのお寺やお宮や森や川に連れていってくれました。

そこで、鳥や虫や鹿や猿やイタチやミミズやバッタやセミやヘビやクモやさかなや、いろいろな生きものを見ました。

そして、そんな生きものの活動をととてもおもしろいと思って、興味を持つようになりました。

そのお山をみんなは、<ひえいざん>と呼んでいます。

その^{ひえいざん}比叡山のふもとで、たつくんはすくすくと育ちました。

2、おうちのまわり

たつくんの家のまえには、田んぼがあります。

家のうしろにも、田んぼやはたけがあります。

ときどき、その田んぼやはたけに鹿がやってきて、草を食べています。

それから、ときどき、さるもやってきて、家のへいの上や屋根の上をどさどさ走ったりします。

庭でおかあさんの草むしりを手伝っていたときとか、木の上からヘビが落ちてきたこともあります。

おかあさんは、キャーッと叫んできぜつしそうでした。

もちろん、ミミズやバッタやカマキリやセミなど、いっぱい虫たちもいます。

イタチが田んぼをよこぎっていくこともあります。

イノシシがはたけを荒らしにくることもあります。

ちょうちやトンボもいますが、とにかく、いろんな動物がやってきて、いろんな姿を見せてくれます。

そのようすを見ているだけで、たつくんはゆめのようなふしぎなきもちになるのです。

おもしろいなあ、ふしぎなあ、どうしてこんなにいろいろないきものがいるのかなあ～、っていうふしぎなきもちに。

3、森のなかまたち

たつくんが小学校に入る前に、お父さんはたつくんをはじめておやまに連れていってくれました。

いつもは家のまわりからお山を見上げているだけですが、きょうは、やっと、お山に登れるんだ、とたつくんはとてもコーフンしました。

お父さんは、森の中でお父さんのお友だちを教えてくださいました。

たつくん。これが、お父さんのお友だちの〈森の魚くん〉だよ。

それは、きららざかと呼ばれる坂をふさいでいるふるい倒れた木でした。

たしかに、よく見ると、さかなのような顔に見えました。

これが〈森の妖怪くん〉だよ。

それは、へんな形に両手をのばしている木でした。

これが、〈森のサルタヒコくんと森のプラトンくん〉。

それも、道をふさいでいる大きな木で、割れ目のところが、とがった顔や考えごとをしているような顔つきに見えました。

お父さんによれば、サルタヒコという神さまは、とうせんぼして、よいものは入れ、悪いものはことわる神さまだそうです。

これが、<森のモアイくん>だよ。

それは、角がいっぱい生えているような、こならの大木でした。

大空に向かって角を生やし、ニコニコと笑っていました。

へえ～、お父さんにはたくさん森のお友だちがいるんだね、たつくんはびっくりして言いました。

すごいね、おとうさん！ おともだちがたくさんいて。

4、つつじヶ丘

お山のとっぺん近くに、<つつじヶ丘>と呼ばれるお花畑がありました。

五月になっていたので、そこには山の斜面一面に色とりどりのつつじが満開に咲いていました。

すごいなあ～、まるで、つつじの天国みたい！

たつくんは、思わず言いました。

そうだよ、たつくん、ここはつつじ天国、ごらくじょうど、なんだよ。

つつじヶ丘のいちばん見晴らしのよいところに、たくさんのお地蔵さまが並んでいました。

おとうさんは、そこで、なにか、となえごとを言っていました。

お父さん、何をお話していたの？

苦しんでいる人を助けてくれるお地蔵さまにね、お経をとなえていたんだよ。

お父さんは言いました。

そこは、展望台のようになっていて、周りの山々や湖が見えました。

あれは水井山、その向こうの山は比良山、その下のみずうみは琵琶湖って言うんだよ。

うわあ〜、すごいね、きれいだね、鳥になったみたい。

そこからは、いろんなものが、下の方に見えました。

しばらくして、お父さんは、そこで、三回、くるくと後ろ宙がえりをしました。

何してるの？

たつくん、これはね、バク転という後ろ宙がえりだよ。お父さんはね、いつも、ここで、三回、後ろ宙がえりをするんだ。

どうして？

ありがとう、ってきもちをあらわすためかな？

へんなの？

たつくんは、お父さんはちょっと変だな、と思いました。

5、そもくこくどしっかいじょうぶつ

お父さんが教えてくれました。

このお山はね、ひえいざんと言ってね、八四八メートルの高さなんだよ。

このつつじヶ丘のむこうには、えんりやくじというゆうめいなお寺があるんだ。

そこに、やくしによらい、というくすりのほとけさまをまつっているんだよ。

みんなのびょうきをなおしてくれる、けんこうとへいあんになるためのほとけさまだよ。

もうひとつね、ふもとのびわこのほとりに、ひよしたいしゃというお宮があつてね。

そこに、「おおやまぐい」というなまえのふるいふるい山の神さまをまつっているんだ。

そしてね、ひえいぎんのなかにあるえんりやくじとひよしたいしゃをぐるりと千日間まわりつづける「せんにちかいほうぎょう（千日回峰行）」というしゅぎょうが千年もまえからおこなわれるようになったんだよ。

どうして、そんなしゅぎょうをするの？

それはね、このくににすんでいるひとびとやいきているものすべてのいのちのしあわせとへいあんをいのるしゅぎょうなんだよ。

そのひえいさんに、「そうもくこくどしっかいじょうぶつ（草木国土悉皆成仏）という考え方が生まれてきたんだ。

草も、木も、国も、土も、みな、ほとけさんになるっていう考えだよ。

たつくん、お地蔵さまのまえで、お父さんといっしょにとなえてみようか？

うん、ぼく、いっしょにいうよ。

お父さんとたつくんはつつじヶ丘のお地蔵さまのまえで、いっしょうけんめいとなえました。

「そうもくこくどしっかいじょうぶつ」

「そうもくこくどしっかいじょうぶつ」

「そうもくこくどしっかいじょうぶつ」

「草木国土悉皆成仏」と。

なんかいも、なんかいも。

6、おとうさん

たつくんのお父さんは、てつがくをべんきょうしているだいがくのせんせいです。

おとうさんがいうには、てつがくは、

あるとしるといきる、ということをかんがえるしごとだそうです。

あるとは、どうしてぼくがいるのか、ということ。

しるとは、どうしてぼくはぼくであるとわかるのかということ。

いきるといことは、どうしてぼくがたべたり、ねむったり、おはなししたりするのかってこと。

どうしてお父さんが、そんなことをかんがえるようになったかというと、こどものころになんどもなんどもおなじゆめを見たからだそうです。

こんなゆめです。

左の手のひらに、米粒ほどのちいさな丸い玉が乗っています。

見ていると、みるみるうちに、その玉が大きくなっていきました。

ピンポン玉くらいの大きさから、テニスボール、バレーボール、バスケットボールのような大きさにふくらみつづけてゆくのです。

たいへんだ、これはしっかり両足を踏ん張って、両手で支えねばと思って地面に足を踏ん張ろうとすると、どうしたことか、地面がなくなっているのです。

そのとき突然、ボールはぼくはつし、ものすごいちからでとびちっていきました。

そして、そのぼくはつの勢いで、巨大な玉に必死にしがみつinaながら、果てしないまっくらな宇宙の彼方へはね飛ばされていったのです。

そのあまりの圧力で、子どものお父さんは、「ワアーッ！」と叫び声をあげて目を覚ますのです。

お父さんは、そんなゆめを何度も何度もくりかえし見ました。

どうして、おなじゆめをみるのかな、お父さんがてつがくを勉強するようになったのは、そのことがきっかけだったそうです。

やっぱり、おとうさんはちょっぴりへんなの、とたつくんはおもいました。

7、たつくんのゆめ

ひえいざんからおりてきて、つかれてしまったたつくんは、そのよ、すぐにねむってしまいました。

ふかいふかいねむりにおちて、たつくんはとてもふしぎなゆめをみました。

たつくんは、よるのひえいざんにまよいこんでいました。

見上げると、満月の光りがこうこうとてっいて、森のなかを青白くてらしていました。

森のなかには、お父さんのお友だちの森の魚くんや森の妖怪君や森のサルタヒコくんや森のプラトンくんや森のモアイくんたちがいました。

たつくんが近づいていくと、そのお友だちがつみんなお寺でよく見たことのあるほとけさまに姿を変えていくのです。

うわあ〜、すごい。

そのうちに、そのほとけさまが、つぎつぎとぼくはつして、ほしになってひかりながら、あちこちに飛び散っていくのです。

なんか、線香花火みたい、とたつくんは思いました。

そして、いつしか、森のなかはキラキラした星でいっぱいになりました。

そこに黄金の鳥や、銀色の虫や、いろとりどりの草花がいっぱいに咲きほこっていました。

いろいろな色のつつじも満開でした。

うわあ～。

そよそよと風が吹いていました。

いつのまにか、たつくんのからだがふわふわと浮かんでいました。

そして、かぜのように、草や花や木や鳥や虫たちのあいだをそよそよとかけめぐっているの
でした。

きんいろとぎんいろのこなをふりまきながら。

きんいろのこなは、お父さんの教えてくれたひえいざんのほとけさまのやくしによらいと
いうくすりのほとけさまからもらったこなでした。

きんいろのこなをほとけさまからもらったとき、<このこなをすべてのいのちにふりかけ
なさい。そうもくこくどしっかいじょうぶつ>というこえが聞こえました。

そして、ぎんいろのこなをおおやまぐいというひえいざんの神さまからもらいました。神さ
まは、<このこなをすべてのほしにふりかけなさい。かんながらたまちはえませ>と教えて
くれました。

たつくんは、おしえられたとおりに、かぜになって、空と大地にあるすべてのものにこなをふ
りかけつづけ、そのうちに、こながなくなってきたので、じぶんのかおもてもあしもぜんぶ
をこなにしてふりかけつづけました。

たつくんのからだからさいごのこながこぼれおちたとき、ほとけさまとかみさまがびかつ
とひかりました。

たつくんは、それが、<いいんだよ、それで>と言ってくれているようにおもいました。

8、よくあさ

あさ、目が覚めました。

おはよう、おとうさん。

おはよう、おかあさん。

おはよう、みんな。

たつくんは、ひえいざんにむかって手を合わせました。

そして言いました。

<そうもくこくどしっかいじょうぶつ>

<かなながらたまちはえませ>

